○ **イトラッキョウの一新品**（外山三郎） Saburō TOYAMA: A new form of *Allium virgunculae*

イトラッキョウ *Allium virgunculae* F. Maekawa et Kitamura は先年私が，肥前(長崎県)平戸島でみつけたもので，今のところ，平戸島南部の特産種である。本種については，植物分類・地理第14巻(1952)に北村博士の新種としての記載があるほか，平戸学術調査報告（京都大学，1951)。続日本植物図譜(1938，寺崎)，植物研究雑誌 第27巻11号(1952，前川)などに，それぞれ記事がある。

最近，同地の平松信夫氏は，原産地の屛風岳に近い佐志岳で本種の白花品をとられた。よってこれにオトメラッキョウの名を与えたい。なお，イトラッキョウは，屛風岳，佐志岳のほか，平戸島南部の中津良，古田，津吉などの山地の集塊岩上や草地に，かなり広く，しかも，ところによっては極めて濃厚な群落をつくっている。ついでに記せば，イトラッキョウの和名は，最初，牧野先生によってつけられたものである。

Allium virgunculae F. Maekawa et Kitamura f. **albiflorum** Toyama, f. nov. ——Flores albi.——Nom. Nipp. Otome-rakkyō (nov.).

Hab. Kyūsyū, Prov. Hizen, insula Hirado, mt. Sasidake (S. Hiramatu, 18 Nov. 1960—typus in Biological Inst., Faculty of Liberal Arts, Nagasaki University, Nagasaki).

○**クマノゴケの産地について**（水島うらら） Urara MIZUSHIMA: Localities of *Theriotia lorifolia* Card.

朝鮮及び本邦特産と称せられる一属一種の稀鮮，クマノゴケ *Theriotia lorifolia* Card. の産地は本邦では九州，四国及び本州の関東以南に点在する。此の種は稀品であるが故に却って多くの人々に注目せられ，現在迄に岡村周諦(1904，1914，1916)，中路正義(1924)，植村利夫(1934)，堀川芳雄(1934)，野口　彰(1935)，辻部正信(1947)，高木典雄(1949)等の方々によつてその産を報ぜられている。中でも1924年に中路氏が下野塩原からこの蘚を報告されたのは，本州，紀伊以南のみにその産が知られていた当時としては驚く可き産地報告であつたのであろう。それ故，この報告は多少の疑問を持たれたのではないかと思われる。しかし1949年に高木典雄博士が三河及び武蔵，刈寄山にも同種が産する事を報ぜられて，その空間を大いに埋められた。其の後，筆者も東京附近でのこの種の産地を注目して来たが，西多摩郡，刈寄山の他に同，青梅市（旧成木村)，南多摩郡，高尾山，秩父郡，野上町等にも産する事を知つた。又，上野，妙義山では同種が至る所の水湿な岩面に多産し，殊に筆頭岩附近の陰湿な崖面一ぱいに良好な成育をしているのを見た。その産量と良好な成育状態を見るとここが北限地に近接した産地とは考え難い。従つて此の蘚が下野，塩原に産する事は全く不思議ではなく，成育に適した暗く多湿な谷間を選んで更に北上している事が推測される。関東以北のモスフロラが更に鮮明されればその北限産地は更に北に移ると思われる。それと同時にクマノゴケの如く形態，習性が共に特異で同好者の注意を惹き易い種でさえもその分布圏が今以てはつきりしないという事から考えて，蘚類の分布論が云々されるのはまだ遠い後の事であろうと思われる。

ちなみに国立科学博物館所蔵の笹岡氏の標本中に *Diphyscium laevinerve* Dixon, Co-typus と標された標本（笹岡 no. 4943) がある。これは恐らく Dixon の未発表品であろう。産地は武蔵，高尾山であるが，これを観ると葉は非常に細長く，乾燥状態で捲縮し，葉の中肋は基部で不明瞭，且つ葉巾の$^{1}/_{2}$を占め，中上部で殆ど葉巾全部を占める。又その部分の横断面では葉細胞は多層で，葉緑細胞と透明細胞との別があり，葉の全表面を被つて葉緑細胞層があつて，内部には透明細胞群を有し，且つ両縁から中心部を連ねる一層の葉緑細胞層がある。この性質は *Diphyscium* 属の葉の構造とは明かに異り，*Theriotia* 属の特性であつて，一属一種の *T. lorifolia* によく一致する。終りに標本を御見せ頂いた国立科学博物館の小林義雄博士に御礼を申し上げます。